

interview インタビュー

爽やかな装いでさっそうと登場した。インタビューの前にもものまねもご披露してくれた。目の前で直に聴く虫の音に一同感銘を新たにした。とあるテレビ番組で本物の鈴虫と小猫さんの鈴虫がメスの鈴虫に求愛競演したところ、小猫さんの鈴虫に本物の鈴虫がむらがったのも納得である。ものまねを届けられないのは残念ですが、早速インタビューをどうぞ。

(聞き手：阿野光男、小島愛子)

プロフィール えどや・こねこ

1949年東京生まれ。父は江戸家猫八氏。親子三代のものまね芸に携わる。テレビ初出演は59年。72年落語協会加入。81年放送芸大賞受賞。90年ベスト・ファーザー賞受賞。フジテレビ『素人民謡名人戦』『小猫話題にアタック』、テレビ東京『GAME EX』、NHK『生活ホットモーニング』『笑いがいちばん』『おもしろ漢字ミニ字典』『真打競演』などに出演。現在は全国で、「文化」「健康」「自然環境」などのテーマで講演活動も行なっている。

演 芸 家
ものまね

江戸家小猫さん

——ものまねの練習はどのようにされるのですか。

新しい鳥の声の訓練をするときは、野山に行って本物の鳥の声を聴いて、さらに、その鳥の資料やCDなどの音源を繰り返し聞いたり、色々なことをミックスしながら訓練します。ただ、例えばウグイスができるようになったからといって、これで安心して休んでしまったら、たちまち腕が落ちます。ですから、自分が既に習得したものまねでも、毎日のように訓練しなくてはいけないということです。

——本物を聴くことというのは大事なことです。

それは絶対条件ですね。ものまねをするというのは、単なる音の模写だけでなく、例えばその鳥がどんなところに住んでいて、どんな声を出しているのかとか、どんな気分で鳴いているのかなどを、その音をリピートしながら研究しなければなりません。そのうちに、鳥達の息吹というかハートがわかるような気がしてくる

んです。これをしっかり掴まないと、鳴きまねはできません。言ってみれば本物の鳥や動物達に、ものまねをする許可を頂きに行くようなものですね。

——お弟子さんはいらっしゃいますか。

おりません。本当のことを言うと、このものまねは、なんてこともないジャンルなんです(笑)。犬がワンと鳴いたって何が面白いんだってことです。そこに妙味があって、うまく構成されていて、いつの間にか楽しかったねって聴けちゃうからいい。また、江戸家として代々ものまねをしているので、僕がやっているということで安心して聴いてもらえるという、不思議な認められ方をしているんです。実はそれがひとつのうちの個性であって、僕にとっては大切な財産です。

——小猫さん自身がものまねをやろうと思ったのはなぜでしょうか。



ものまねの訓練をするときに、本物の声を聴くことは絶対条件。
言ってみれば、鳥や動物達に許可を頂きに行くようなものです。

やはり子供の頃に親父の芸をみて、すごいな、と思ったことですね。お客さんが受けているのは子供心でもわかります。拍手や笑い声ってすごいですから。

もちろんそれから先が大変ですよ。親父からも、やるべきことをやらなければならない、と言われました。後継ぎという使命感でやるのだったら続かないけれども、ものまねが好きで、自分もやりたいという気持ちが本当だったらやってみろ、ということでした。

——外国人の方にもものまねを披露されたことは？

何度かありますが、外国人はウグイスを知りませんので、「ヘー」という感じですね。けれども指笛や口笛で色々な音を出していることはわかりますから、その技術ワークに対しては素直に拍手してくれます。

犬や猫はわかりやすいそうですね。「さかりのついた猫」を説明する場面は面白かったです。最初は迷いながら「Exciting Cat」などと説明していたのですが、あるとき「Boyfriend & Girlfriend」と言ったらかなり受けました。そういう外国の方が喜ぶセンスを学べば、複雑な英語を使わなくても結構受けることができるかもしれません。

——なぜ、ものまねを聴くと面白いと感じるのでしょうか。

人間には、何かのまねをするのが楽しいという本能があるのだと思います。子供だって見よう見まねで色々と学んでくるじゃないですか、学校の先生のまねをして結構受けたりして。本能的に好きなものを満足させてくれているという気持ちになるんだと思います。

——動物保護の活動をされているとか。

野鳥の観察をしているうちに、様々な専門家の方々と会うようになりまして、そのうちに、自分のできる範囲で環境の大切さを伝えられたら、まねさせていたでいる生き物達に恩返しができるかなと思ったのです。具体的には、昨年、エドピリカという鳥を保護するシンポジウムに参加させていただきました。エドピリカは、以前は北海道でよく見られた鳥ですが、近年激減しています。それはなぜかということを真剣に考えて、地球の環境をきちんと見つめ直すことが必要だと思います。

——ちなみにエドピリカの難易度はいかがでしたか。

エドピリカは、技術ワーク的にはそんなに難しくないのですが、「ウエーッ」（編集部注：文字での再現不可能）という、とてもヘンな声なんです。これをステージでどうやるかが問題です。こういうときは、情景を説明します。海鳥というのは、とんでもなく遠いところからエサをつかまえて、ゼイゼイ言いながら小高い山の岸壁の巣にいる子供たちのところに行くんです。こんなに大変じゃ、「ウエーッ」って鳴くのも当然で、そういう話をしながらやるわけです。思えば世の中のお父さん達とダブるでしょう。そういうのを漫画チックに伝えられればと思っています。

動物や鳥の生態は奥が深くて、表現するのが面白い。ドラマがいくらかでもありますからね。

——お父様から教わったことで一番大切だと思っていることは？

芸というものは、「これでいいんだ」ということはない、いつでも一所懸命に精進して、その姿勢が一生続くだけだ、と言っていました。常に一所懸命生きている、そういう生き方を大事にしていきたいと思っています。

さらに、芸人は芸が大切だが、それよりも大事なものは、人間として、社会人として、まっとうに生きることなんだ、そして、そのことを「芸は人なり」といつも言ってくれました。それは、なかなか難しいことだと思います。でも難しいからこそ、親父は僕に若いうちから教えてくれて、そういうふう生きるんだぞ、と言い続けてくれたんじゃないかなと思っています。

（構成：小島 愛子）